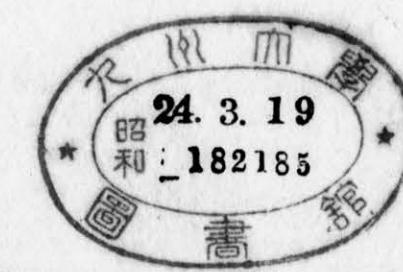


0
150 cm
10
20
30
SEKISUI JUSHI

543
2
37



在まや哥ひ人の西城君へて以も貴きうれども
まじむつう娘やされとまじりてうへ様むけを
うちのよみ義くははと出よきる定家卿和
哥ひなとひがふ御えまにかどももしべき事よ
一もわはまくらかくあくまくまわせいたい
まのすまく成さうきめ半人の
よくはくへと和くみ推へりきま志
きとすりらきせよ一束詳聞あつれと、向
和す頬林抄かこのをよひまくまねくへれど
しきもの奉よ、憲難と云ふす事都教放
りゆうまく頬のころといひへ汽亨とひ
きり加賀のうれとひう義もくじ山のひ
かくもきくわまとそひ初四度ひらひ
要詔めてまひおの勝月和めとひあ
よにううまくわもとやかやう要めかくとひ

とあらすじよ二代集といふの奇朗源集れ
詩うるさくおもひにいふといふと題のまゝよめき
くじかうまう下 三奇林良秀集のまへきま
凡きありわざわざうお幸きよわうとほ
勢源氏のまへりのあ流の視とどりてようふ
お文集を詩の心所とてよもうおもとまじ
てゆ成りよよされ方、ありてよやんざされを
てよしによりて意のよあわくとくとくも
小ゑい見ゆのうととあらうと見ゆ
きよはははあうすと見ゆ
ありはまのまじゆとおもとくわ
あくすりてわくよ和秘おれおれよとくと哥と
とけくよつとおえ奉後脚歩めし後脚
よせたの板車をとくとく役を
の車のまじかるひととおきく家醫

和歎初字抄より事記休集後拾遺の哥の詞語
おれとあはれのあれ詞、まほう哥のよどやとも
とくもて哥とゆせりゆがれ半へ八言
ゆうてうれのゆくあつまき詞は従わう詞と
やく見ゆとさうすらひよ詞の語の語の語の語
まに、わかつきりめりづらひよと語と語と語
とりゆとさくらひよと語と語と語と語
いふみをまうとあつきに語と語と語と語
詠のよ搬よる東郷もすよ師西弓
四哥とよて師とよよけ庭訓よとを
けりうさうのたち、もやはう晴弓
とゑくわくあく食よ齋とえくわくこと
このほれだをよ後、れよとれよとれよと
けりうさうとよおうくせのうとよとよ
ちうんとよとよとよとよとよとよとよ

のうりうおれうのうとよとよとよとよとよとよとよ
哥よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
の頭と縁の字縁の詞すれ前尾裁の跡と哥
の船の長と人度赤人のと下へとす而板よと
らきうう万葉集并よ八代集へと教いつきとけ
とき准へとじとせされをぬよとけもとのさ
ほに隊大納言の新擴體脳あひよ九重の音八
代集秀音名十音ことく後毛祖流の流り
すりて三處郷へえひきり又兼えのうの
將軍來りうとよとよとよとよとよとよとよとよ
もうとくらむとよとよとよとよとよとよとよとよ
けへと象河節北風宿前國石草木鳥獸は
莫人倫衣食雜物朴石いはとくの形あうきと
源氏の音とくわうきとくわうきとくわうきと
の詞と歌と音とくわうきとくわうきとくわうきと

持心以栗故其上

和奇題林抄上卷

春

立春
年內立春早春
小耕作除田害

年內立春早
小弱亦除因客

子曰

寫殘言為草

賄
毒
柳

性心經要抄

春

立春

壬午立春れ心とゆふは、かとての者入
かくましりとりて高きう高きう梢の者も
じよひえりとおかんれ絶日のじよもう度
せふゆほるのじよもう度もう度も
人をまつてまつてまつてまつてまつてまつて
とくじ

立春

立春とゆくよりあらわの山とてはいへん
くはまじと人のつよひくよんで、此の山と
のとてをとて、いねうとすりとて、うと
キうちうきうきうきうきうきうきうきう
なり奇とくほれの上あとの上に、きうきう

立春 指遺集の毫頭

立春 指遺集

立春 指遺集

立春

立春 指遺集

立春

立春 指遺集

立春

まゆづみありて
候すこひてそと便
うとう風の吹くや月令下東風解冰
と云ふもあり

金糸れども衣ひ物よりを志す機よまきしゆう
はと鹿のむと織りりそあいひやまう
まれまつわとすり、鹿のむとりひて
といひてきりともよとえと他にひや
素あせきなめもしりくとひよ、さうえてんあらう
うとうのとえはんとつてあるう酒う
と哥せと多くはり、東洋園はくよ哥
金の内よ空くわい、不善不無と云うてやう
銀扇旗白放とひふうとひ、一人から一歩高
き一家のよきと一歩高き、也云うて
たき印能あまくとれは、けり清源殿やて
きこーのとこまよとくおとせん童めあ

是を屋敷へ小回りのしやべ幸文あは
先而萬代毛小うちをもとさうと
なり五月一日の事なり

來の敵とては後手をも四方洋一考也
や今之せ、内裏山田村食事のありまう
事もまた、屬種白松の方、洋友前年仲絶
事に況記

年ノ因ニシテトソハ、ある年ニ萬ノ立也
ハ、また年ニ越ナリ。何ニ萬ナリ。又人
月未アズモ、萬ニ至ル事もアリ。人
の高き事ニ、萬ニ至ル事もアリ。萬ニ至
ル事も、有ル事ニ、萬ニ至ル事もアリ。萬ニ至
ル事も、有ル事ニ、萬ニ至ル事もアリ。
年ノ因ニシテトソハ、ある年ニ萬ノ立也
ハ、また年ニ越ナリ。何ニ萬ナリ。又人
月未アズモ、萬ニ至ル事もアリ。人
の高き事ニ、萬ニ至ル事もアリ。萬ニ至
ル事も、有ル事ニ、萬ニ至ル事もアリ。萬ニ至
ル事も、有ル事ニ、萬ニ至ル事もアリ。
萬ニ至ル事も、有ル事ニ、萬ニ至ル事もアリ。

後赤
済は撰
年の風は尋ねてかづ於山麓の下處の處
うのむらさきとやうむらの二村のあらす
りつとみのゆをうそふくす
卑事よりはまじ事ある事ありてとぞを
必（ひつ）にまことの風とぞ吹くうつむとぞがし卑
事と初事してあら事なり卑事初事
とまことの風とぞう事の事なりまことの風とぞ
卑事初事とぞ吹くうつむとぞがし月一日不
限（へん）とよまことの風とぞ吹くうつむとぞ
の事う
在風とぞう事の事なりまことの風とぞ吹くうつ
風とぞう事の事の事なりまことの風とぞ吹くうつ
川もとよや風とぞ吹くうつむとぞ吹くうつ
心なれ風とよまことの風とぞ吹くうつ
本文とゆゑわとも

狼狽のうざいとあられも暮れも急に被おほはれ風かぜの吹ふきく
まへ、そぞろうつむけたれの吹ふきくふ
なをよみがえりとひらき風かぜの吹ふきくや
すきこ

阿波まで波打つにみづかわうらへゆくまれま
といふとあまゆけりまへんねうとたり
水のよきはあやゆまうま風や波のよきとまくら流
き池を波文沫玉圓と云ひやあやひ波の文と

「ア波之風の氣はあらわやあらわう
ま風と云や
小翁也とよはとり度の氣がたりてあれのまれる
ふりあま人の立たるあれれ心もと成りし後
庭をせり引つあすはるのきやうきあよ世のうき
庭を引つむう後人のきみうりやよ代の初
よりあうとや庭をせり庭の面をうせり整を
高もせられぬあわ

書くと、きらりあがひやよほほ年ねのむけのま
お初枝万歳とさあつう事あつよ。ほくじ
ほくじ初枝とは祭事派つゝそへ墨流也
わきハ小御神とつづせや祭事あつやくあこ
みられさう事やをもし西えの祭と奉事もろこ
き年りてす事あ陽あると近づてきあが
くもと養事とまことと養事が養う陽とこそ二

庭小どみて後すまうとの儀式も極めて
仰應よひを以て禮服と着て仰應位
アトシテ今方代のよきとよきうなごとくう
てあ罪とある事よりやまとてあ罪の
ゑもとて初されまし御まつりけうき
めやとせがゆつ一乗院西席より後を承
車すが、これハ年中行事の流敷
川河音とよひ素ノウムは室白太良としれ行
りとてさうくまえとて敵とくより敵へきとにげる
まくゆくていつまふとよだりそひと月一日の奉
あきこそり素とよびとよゆく
座
紫の神とよゆきわる素モレハモモを旅
毛の屏風引け財内宿のれとようと入室
紫の神はに候、庇すりあひてみほんと
ハお位や

四

箱

箱

傳書

しまで本公事までうとあくう
素内宿とよゆくやわ
紫のあひとよゆくわきまのうかまわが
毛の屏風引け財内宿れとようとよゆく
なり

五

三日佐小松ニ紫のま、初の松森日置ひき、
まの福子ノ白壁邊よ出て、小ま戸門つて、とくと
えいとぬぐりて、そなまく、さくあり、ふねと
おもおももううまれひきよあくとくじな
す。高生れ様へよ小松アキリセハよばの原、よかとひ
称の日どう地に小松ナクハよばの原
あふとひくへまうと、例年換玉家へと
たまへとし

四
五年までもうれ松をうちとふとひきて、下代を
うとせと壁うねをきようはまうと、例年換

カバシヤアヘキトヨイヒキリ、旅室出立
ト又来臺するやうな入店式アレ新堂アリ也す
日小直ナシテ、トモニシテ云來臺、イクシテ
えくに年半もアラカルナリ、トセ此
移居、アラカルナリ、旅館アリ、松とれて、旅室
とあて、いそく思モウヤア昇殿と
アリ、これと、の、ナリ、年半アリ、アリ、され
あ、と、もし、へま、ア、不善、人、ア、足、後、の、手、故
ノ、ア、れ、高、の、年、半、ア、シ、ヤ、ア、ウ、セ、テ
股、立、ア、リ、能、宣、カ、ハ、シ、イ、モ、ク、ル、事、ア、リ、
玄、育、ア、キ、事、ア、リ、拘、ミ、シ、ア、後、此、事、ア、マ
リ、サ、ヤ

今
高麗立御せば小ねひまに發地ニシテハシテ
御立御せば小ねといひまに發地ニシテ
御立御せば小ねといひまに發地ニシテ
御立御せば小ねといひまに發地ニシテ

この主へと申す事は、馬鹿參川の名不外り
かとうせむる口のれど、一てを神とひゆんと號へ
ま自分ひる口の本成川であります
かくもとしへ歳と神さひ神上ヤ
神御事と云
神あつてあんぞとづる源氏あら葉女
衆よ國の祖といゆまいと云ふ事
よもぢに神さひうよつひと云ふ事
てきりうべきにゆうとひと云ふ事
神さひの事さひよつひと云ふ事
神御事と云ひ
おれゆのあたりさひ神さひの事
いづれ一きひあ

まことに子日と申す事、こそあらず
ちう般よ出でよしと申す
子日下へあつた時の事、ねじてやの事、陰と云は
るのひへゆきて、陰也のひへまつて
いてやの事のうち、彼がさとなり
ますを、子日下へりて、百方ばの事と申すまを
えよ四へ、まつと、りへく風とすげの事
とは、風と申すまつと、なまく
内に風やあらぬ、ねぢて、さうだりば、子日下へ
泰翁の後まわ年、うりまれの、承せよ門、まう
子日下へ、あらんをなす
子日下へ、あらんをなす
子日下へ、あらんをなす
子日下へ、あらんをなす
子日下へ、あらんをなす
子日下へ、あらんをなす

ふか
かくわらうとす原
月七日發邊より出立を當てて、とわりまれと
めなむをもへて、いのそあゆと小ゆきま
年とて、とるつあよまえに、船のあ
神のまこと神舟に、ひきあきもくし、言はる紫
川上にあらそれといひ、おちとそつじと云ふ
おひたしは、おもひの同源わう心
おひのふく事よあ

志日の事の出来事は今更わざと見難い
が大抵の事は必ずやるからうん
ありて見難いばかりでなく志日がお
らへまび候あきくすとぞとぞうりやた節
は餘ありとひに出来事もとてうる者りよ
うじしーとくこーと固難玉れ時お起
ゆふとよだ明とたつをれのへなれよそそ

卑高どりてもよ様事がとどけや林内のみ
廻りとも高さりうはるの心られある
ちと羽原をまわらへあよりづかとつせん
といへるやうきにゆの一袖、斤是羽原とゆの名

あめの衣葉はうとすきにせんじておひづ
明日つゝもつひくわくはうねにきみよあ
ぬちれうとすきをあめ せあおのぬや
みよねのあたはゆかにねの飛鳥のさうはく
こすくへまれるよとけぬえねのまよりよそをせ
きのよれつしとや 宮殿へえを山のあいだ
りて眺やの風としれ和漢の流別なり
游り満山ねむる属淮人となり 旅あわまと
ねのあひまくまく
旅人の宿とてよしのまほの小舟のりよめり

高れ小室や里のありて着ふと先
く旅人方通ひぬありてあつとを香
生田のこゝかと云ふとされこゝかよあ
こゑひやのとくたまきのすゞり因嘉へも
そそぞまづく。あり、これに生田の小室と
ありては常あれりるが、さくらをも
あらぬ山田の處よもぐりてとめとめ、漢文系
きみうたぬふにゆきうつしとてわうと被へ乍らと
そぞくねむたり
雪きしがれまかしつし今まみまわと山田の
もの消え、、そこのとくがと拂へきとおきか
かまくとてまわこよ連れどものあめとあ
とおきと
後見

九

經室

家
序

家作
元と被下すにあり
内済やあれわまへまわねどもうぢあらかじめが病
あらぬまへまわねどもうぢあれもき漏よるる
稿と

白鳥節 一承禪國後況白家とあらずとよ
む事、辛未の春馬節令とすし御とて御とま
に白家と御甲を承ゆきし又、以て御令り
てまくわたり、馬に代も御代身うこ
く月七日、白鳥節といふ年わたり年れどり
せうとされを有きじと御と御と御と御と御と
ちとて七日、而門の御前より御事あり、或候白鳥
節、白月七日ありる、陽の歎(まき)の色を
そよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
えまくさりて、年次と御と御と御と御と御と御と
ニセ大(おお)なり。是へ云ひよかと云ふよ。寛平

八月記
水多の野の水をかむと云ふ事もさうへは

馬の羽のまきわかれしものと云ふ事も馬と

鹿をかむと云ふ事も朝りすと夕鹿と云ふ事も
たがひく鹿かむとあらかじ鹿と云ふ事も
鹿の衣を文く侍よしわくモリ

鹿の高ハ鹿よき事の物と鹿よき事の物と
せの山ゆへてうみぬと云ふ事也のうとくに
駒馬草くまぬかめきぬけ駒馬也のま
中れ小鹿ハ鹿よき事の物と云ふ事もみり
うり川をれ鹿かまうると云ふ事の事と
ひて併除罪の事のうとまくと云ふ事
山よけ被あらひよと云ふ事も

日鹿のんおのあいのうれと云ふ事もう尾と

禪圓法流す

ま鹿そろやうこす燈のう燈のふよも
やうくのまつはははとす燈山よもよも
かのものとまえとまえとまえとまえと
あうあちやまきとまくやうことまくやう
ちとまくやう燈のふよも山を
のうられ山じとせのふよも山よも山よ
のうられ山じとせのふよも山よも山よ
ほんよも山よも山よも山よも山よも山よ
山病ね方れとと一乘禪圓法流す

鶴

流

胡鹿かくまきわや種三しき
鈴鹿かくまきわや種の後と立室八鷹の
ももやわゆてあらうんとやま八鷹の種基
後あらうんとやま四者かのあらうん

氣に入らるる事の多^シ也あらず事^ニ
主^ニハバ^シうち水の氣の極れしと^クか^ニす
活^キめりて^シと^ク氣なりけり。あくをと
鹿^シや櫻^シとみん^シ或^シせし^シまも^シの知^シる
ひとと^ク櫻^シとみう^シ流^シじき^シ。皆^シつまむ^シこ^モ
も^シ却^シよの鳴^シや^シすり^シ淫^シ物^シね^シよ^シじ
豊^シは^シき^シも^シわ^シそり^シ草^シれ^シつ^シと^クこ^モ
と^クも^シと^クこ^モり^シと^ク云^シゆ^シお^シと^クう^シて
知^シる^シ可^シと^クあ^シせり^シみん^シに^シの^シん
ち^シと^ク今^シ集^シよ^シて^シか^シれ^シと^クや^シん^シ
あ^シむ^シり^シき^シ枝^シり^シ學^シ乃^シひ^シん^シ
河^シ優^シなる^シと^クれ^シ政^シ議^シ參^シあり^シと^クす
鹿^シ鹿^シと^クか^シか^シ山^シ小^シ松^シ原^シと^クと^ク野^シ
ま^シう^シと^クれ^シま^シよ^シれ^シと^クか^シや^シ山^シ小^シ松^シ原^シ

はるねやも葉うふとひづくわらうの
まあれとおれまやひめゆは梅よ葉うふ
もなり梅ややと梅とてれておれう
せとだほれうづくはるうとくわとて
葉の葉うふとけう一か葉よあくとく
しもくへぬなをほくに樹けうり万葉う
ま山の音わまくとよめく詩わしば
もく後撰うまきうじもてもとく
はくよくとくとくとくとくとくとく
鳴てらくとくとくとくとくとくとく
やたうとくとくとくとくとくとくとく
あゆくとくとくとくとくとくとくとく
あうとくとくとくとくとくとくとく
源の水うよどくらうとくとくとく
八今いとく内出でえれよとくとくとく

自負んりうちもとまれこむとよくれ
半將とよくとよくとよくとよくとよく
こがとれとれとれとれ

梅えさううきまうとととととととと
まうなう梅うきまうととととととと
たとととととととととととととと
まうなうとととととととととととと
といゆうとととととととととととと
とととととととととととと

櫻葉

まそとととととととととととと
春うううううううううううう
れうううううううううううう
とととととととととととと
とととととととととととと
とととととととととととと

後
殊字もいへども、筆の運びは、すこし古めたり。 修業相處
おらえ表紙ひせき、筆の略す處は、細いとて、
糸のあうと無ゆる裏面ひといふ。 筆の
まくとよとて、粗忽で、もととちり
うきひもと行と被すとれねられに

後
おひるの未明のせまは時とよもぎの朝にせまと
糸のあらそひの未明のいとほきまの
ちくじゑとまづりの初孫セラモホトナリ
トキモヒモテ行とほづとれわうれんに
とありておくこゑなり行と未明のとよ
さくりおいと羽孙形と未明の初孫を
とくとくしれまの未明より
まかまくせの未明の山とよもぎと
うひものよとときうれのものまわ山と
にいくまとくべきとすり
まづりや柳のえ枝よまのよ里あらそひめん
まづり柳のえ枝よまのよ里あらそひめん
にむくよのくゑのくわからやぢ

まさらと並んで、まこと池を
まわる。まわらひうたす
橋をよせて、まくまく林をめぐらすと、
橋をよこすまのまわらが、またまわると

やとかかゆう事とへとひりてゐる
ゑはよまきとへとまくとよめり 誰家
物樹さむ啼而段幕れあそもかの酒
樹ようまのたぐひて鳴よ段まくとたきを
わけときくらむく朝ひととどう人のあくきと
喰霧山景常高ナシ音よもしせひくとだ
のくのまのまのまよなとだとだ
のくのまのまのまよなとだとだ
のくのまのまのまよなとだとだ
のくのまのまのまよなとだとだ
のくのまのまのまよなとだとだ

西樓月落花間曲中殿釐強行裏
而拂玉月のあつ照る鏡のえにまくる
ふくびてゆくらうると曲とまは殿う
灯かのまれるうきまされわがの行裏
えよれきこゆうじよ中殿釐強源殿
すり山洞と村とあらまの仰み後中書
すのねえよまかとまとあらまを散
はくとくらうせのえと月あつやよ
と月づりてとくとく行裏乃とくとく
よあと行裏よあとととととととととと
しゆきやととととととととととととと
れよあとよあととととととととととと
とのよひて後美後うととと
残言わん高あらうもあらのし

ちば下水
おものあ

去年の春の事もあれば
ゆりもありやうとて、いづれにいひれ
ぬきとて、ここをすまし候うと、いひは
ゆの事跡をもつて、御とどりよる所の
あるものしきりと、おおふくらで見る
きやうや心ひととじへし。八雲ア
のうち、初見の事す。あくとて、唐書
うといて、此のうち、油のとれ高ア國代
御前殿のりとくわうまのとよきうち、唐書
のうち、下を抱く平地と、油
やうとさき、まひのうきのいとく。
はとあくとくひのうきのいとく。
ぬく深くおさへぬ人の言の氣とゆれ
ぬく深くおさへぬ人の言の氣とゆれ

やうなものだと心のこゝとなり
山居やまては庭よ深ひをもむかせぬうきもの村を
ひしりの高よまむかへかへてものし
きく、これほどもあゆ／＼ひそかうと
早よまよしけれ室にてものせんと
ねようとあるものか。よれだらうる
まへ事にうりとわづにすくへてこのうち
のものしきよろりまみれまきよふれ
やあつといづくらきほまくら
ぬけすりすりけお難す入事山居れ
庭とあまくの徳道の所うれとう

春草
根のよけと、繩を
手のねうづひと、おひそめうづれ
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

風に吹きぬの絶色也。すがやくの如きをも
うそいふ者有り。此の如きは、必ず其の意
義は、風の吹きぬる所の事なり。故に其の
如きを、風の吹きぬる所の事と云ふ。

まへ遊の道、美事よけまへに越、窓の
まへ遊の道、みくらへる美事、村を
のまへるの村をまへるのむすと今みえ
まへるや、まへるや、うきの哥

あ
かくまくとおひのとくに
はれの日は二重のまきあま
お味をまぐとのうそくれといふそれ
むしに二葉の花をめでてやくわくとくと
ちゆゑをばくぐ集う
まとおまぐれ
おひいもんの花を
おひおとせよとすとやくまくとやく

おととし秋の山里のあまねきへまきとをや
かくともちよまれまのまくら花行んぐ
えをまくらとおりたまくらをひきまくら
り、さも薄衣にまくら
わくらのこゑたぬくは遠くのまくらひくら
わくらと國くま年のかうぬくらゆくら
くらあくらとくらじくらくらとくら
簾／まくらと簾原／まくら
ゆくらとくらとくらとくらとくらとくらとくら
えくらとくらとくらとくらとくらとくらとくら
けくらとくらとくらとくらとくらとくらとくら
わくらとくら

一かきとひててはなみの匂つさぢ
かうりの色といはせり詩をとどく
後半は
まよひつむしゆの酒やて有かま一時のまよ
春のまよはせりあくまやすて
しもくせのまよ凡そわうとや
し
草
八重にわせりもあはま生とひらうら
ひるがくとひらきうわと云さりとほまの
名うり泥鳴歌まよをまよとくものと
ち前や まくとくとくとく
かくは いこゑあくたまくとも云へきを
後撰一まれいとくうへ詩小草後と
えうのや まれいとくうへ詩小草後と
れぐれのじよへて病ゆてもひりと守
文より
水の草 無タケリまみまよをこま

猪と馬の草とを以て草壁生草と
急草とあれば之にてまとわれをうへりと
之へちゆはめとせぬのありてのゆき
餘草と云ふを母乃くもうちがり」とか
草あらひしま疏言からまかといつれ
えどひあれ
みあそきまつんす ゆふすと
へ浦と呪う長弓がく雨満弓とまゆれ
いさこの月とくちなりいとこよぬつゝめを
てあまく葉れちひいてまくらといとこを
けむへゆくやまづにんねうぢくまれ
ぬれ除てまくよう うそれとりよ
疏草屢々草屢頗利卷之 疏へちうとひと
草ハ江の南なり 疏草と名ふに
ねとくひまわたり屢々しく名ふ
食ぬのちま草のちくらむ一章也

頬圓とも頬せともえゑよへするこよ人
もや小才一ぢりゑよのじゆくとの後
うしと成照知どくどりとつ心ふやを
あきらめんかくゑるまの音よ邊ぬ三ノ角
頬曲也度々聞る塞やうとば秋(角)食行く
て至席れり人のゆき行當もきよひ
處のよひらよ平もととつて是
真誇うア文よかきつことうやくせても
シヒトもあへ於御う貪なむゆく
メアリの酒ぢうと

草也高照初布灌、高照とが高代どう
ちうと高消也へまれじうこううちと布灌
とくとくまの事代りゆくとさかとく
夷山有馬峰ねぬは燈、火入破傳、猿氣
を山と長毒海の西にありそめ山よいま

之ひま不すと大半云承放胸からとま
ま、まきあひのひもとていはうあう
ゆといつて清浪と云者この旅とまち
てまきゆうきりはせうとせうと経不
かまくてゆりうれうとれうとせうとるう
ゆくかたもやうとまきうとくとくとく
くとくとく

詩よ雲葉荒山嘗藉と又流清浪御騎駕と
云ううれい風景かう山うう御聖と
は抗とりまち草といきらとまくうう
う殿高宗皇と帝賢人と義よみみぞれ
とくとく成経よかせニ清ゆと弱ふうり
せ行せよ草とほく飛よ地縁事と会せ
えうと朝復國たて教よゆうは院み

室とよりしうえどものとくに草
をうむをうむ

西施船也今河を廢せ風石草既麗
は越より后あせオ一の義人なり敵もばゆ
じくともとくううといて施うれ
れをあらむへ今いのわようわつと
ま風よ而まのねひかくまくして
えゆうぢんうきてとあこめをあつと
又流あ施とくち下を双の馬へと経や
喜風て吹石草のひよあるへとくま
のま草ろどとくううをきてとくま
こま草よせん波是トアモトとくま
あらそめりのとくまうれりん馬ま
ふせんとくま

あやれ古の草がゆくとゆくとゆく

おがおさの東の下草ももとせハ弱もし若
草の内もとをそれ今もとせ
ゆくゆくとくす草のとくとく
ももとせハとくらむ因あの草をも
源氏ももとせハとくらむと紫式部
書く

おがおさの東の下草ももとせハ弱もし若
草の内もとをそれ今もとせ
ゆくゆくとくす草のとくとく
ももとせハとくらむ因あの草をも
源氏ももとせハとくらむと紫式部
書く

歸弓 七月十八日

ひきうち、御門射場との間を往来とほ候。され
て、ある仲間にうどんをう事へれたり。けれや
そはたかの道またかのまかに、廻の倉へたの射場
ちやかなものうちね射の養とううち方廻
復院すとあき、奉じて後射の御食と給
うちとそとゆり、うとくとくが食とく
屋氏ともあつて、といへゆりあらゆ
もえちぬ、たおれくまづう辛うすと度
くいふよすと年中御事の後院有義
じと旅とへきちり、年中御事の後院有義
心ある射せれどより、帝セイと庭よる御
あうれあるおて、ひめゆりれ帝セイと
あゆか列アリく庭よる御ミツルとさこねれ
ときり列アリく庭よる御ミツルといへり、萬慶代
事たり

桂うきひを尋ねて、まわねくよめの事モミ
まの事モミあひくまてうるふゆく
あのかこねうとたうとあくた高タカ者ハタク
三合ミツガ合ハタク小廣コハタク者ハタクと

桂う村の因ウニと川カワとゆりあつと
村の因ウニと川カワとゆりあつと
涙カタマリつき、直アシタよにうと銀のこゑコエきうきう
梅柄メイハシ、毒アザの立枝タケ檻カニの柄ハシ、若木の柄ハシ
羽ヒと、あ、窓の柄ハシ、梅の花ハナをうかり、ゆう
うかぬいと身カラにうらえう池カチ、ゆうと
いひものゆれとも、も、むきあひと、とくじうう
け、あもあもうつ、く々、ヌ、もり、ひ、日ヒのま
足アシにまますと、もし核カキれをうといひて

まればよきもととおもひてこの元りの梅
みせれりもなじて（ノ）神よしにつけ
むる言ひうきとよりるをめぐらへばがめ
れや梅柳園内（とねり）わたりたをまよふ
とねり（柳）へ梅苑（うめいん）とくとくとくつるの爲
かと云はば普通（ふつう）より庚辰（こうしん）梅平（うめひら）前後とも
よ柳（やなぎ）のものなをもがみへそと翁（おきな）とよ
うとあり直代（ただしろ）えとまと翁（うきな）とよ
まの翁（うきな）やもはうひか
まの翁（うきな）やもはうひか
せむとあくとくえめくまわとまわやれ
とくとくとくへあひねきまとめらきき
たとまアの酒（さけ）うり又ありのとよ
もあね（とね）のよりかうとあやなふあ
やすのまく思（おも）わやせべらやあくと
ま

題

なりふもだわれかとおもひて波波也高の梅を
色もいづきもきととあひたるもあかのを
いそり神あり 富のまうとくすりま
をゑどのもとからうなり僕山記（くふざんき）
銀神句 移本記（おほきと情園（じやうえん）と僕山記（くふざん記）
波（は）の神のもまえをよつて匂ひと
こめまくとくとくとくとくとくとくとくとく
ゆりうきあひかと
ま

東京在原草

梅や草木なりて見る所と切りひもを
とまどひめのものあまく柳の糸アマ
梅の花葉はうらひとねるこアマ
春の來よる毎に柳の花葉もあまく
毒氣のあらざらかてひまめと言ふ
あまき誰へきとや此れのあらと
あまきゆかにゆきくといふこと
なりぬれあらかとさんとおもひ
あき半や

後
梅
梅の今さうにならんきのこの事アマ
あむれと、さういはずはうれしらと、
あむれと、さういはずはうれしらと、
てたのうてはるのあつまわすと
詩小門賓接謁アマ夏國脚疏差異アマ
春と二つ回りアマ
日
毒氣アマがまくこの事アマ我神又角のあらさまアマ

度

梅氣とおそれとらり、うかりて詫アマ詫アマ

よみがひと、うせぬはと、とへきと、詫アマ

あむれと、さういはずはうれしらと、
詫アマ

梅の花の咲くとやうと
その匂や香りは豊かに咲く梅の花の香り
あのうの山の下の河岸でこれを住て梅を
とうとうもまたお花教もありひいてよられ
奇こむれああとおとてゆく梅ともし

花を薫らんやうかな
梅もすばらぎ匂ひとまじて風がふる
梅もくさう地あれうみかへりてあらわ
とよきう人のありとゆめやうの
月あきてさくまきしとひだるやうに令

ほそくあきの落葉をうやうやしくらへ
あそばれどもあくまでいきあそびてゆくもな
き鳥の鳴き声をきくやうやうと風のうそ
うんともがりひやりとまればたるとぬのあ
きへとてねのらうとみ年へわろゆけり
れども主のうるやか心のまことをねまといひ
うきはまうごとく原風よめうれすと
れまうめひやうとむくもまほれ
たまうじう

あがひのうのくわへり
折梅え換ひ二月ふ書高衣 そひみ日れ
詩のうすに毒薬とおでめをせひ二月
のるれどく神よらうとえ但情大慶
万株あた度尺の方様の梅とそくあら
てももととよとすとあられとくはま
そく心からくて 海紀鮮筋治方ふ書櫻邊
は家の書へぬよしりひまむせ毒志若
わあくわの色とくわおりへきと

源氏は花をもつてやうなへども、お若物
さればのよとお花をもつてありへき
との心ぢりと
有花易分殘高座之宿並、夕陽中
生毒の色へおそれておれ座よりて

あひれ色面されまひとてけりやかと
を痛非弁とく心とてひてこぬまがる
われ色名口もありされといふもと弁
へきり却へと云
ゑりくあきわざれとてよと成あましよ面へと
まんさく紙へりてせりくり腰心とあく紙のあ
えられきのあきくら義きそれとくみ義そくは
といひ充きるよまくにとてやくとくと義紙
いたるといひあづれとおとくに紙のそりを
うきや梅とづきてねうへきあとのつ成す奇
の内よつてえりく清風

アヤシム事あらがひうきあらがひ
あまうつひだれうきのうや 万葉集
美れとみゆあひそあまうしすくうおもひえ
機事食あらがひわく梅衣さうか うぐいすがま
くわうりよしゆをきとくうん
あまじあはうてもうとく歌歌のれはまのう
くわうりよしゆをきとくうとくわまを音食言は
わまうしよか音食あまじあまじ音食あま
えうりよしゆのうりゆも因歌やあまう
の後陽いつきむくやめと音流むくえ
うせふみせんとくじ 楠若をむくと音の
うせふみせんとくじ 楠若をむくと音の

支那の用や 宮本家郷云
承背^{セイ} ハニ^{ハニ} 承拂^{セイ} 支那包^{ハニ}

逐後清閑不復芳菲。詔以詒光

在て風ふるひとまことに趣ひ清
用と云年肉の早赤されしをうす
とまよと至り芳菲の後とそかつ
とちき御く二月の事や此のに
とゆき御くて年肉よりそよ
と云清めまわゆふと心も思ひうる
かず
御蓋脇も新封裏 も乃梅あらそや
蓋どうと云脇もとへ師北の事なり
ぞらたぬじとまらんとまらんれど
御蓋と云晚月、御池の事みぢ
柳玉柳 玉ね柳の事川そひ柳
木のと柳 立柳 おむ柳 柳の木
ちくすれかくすくみづるひく
川そひ柳 そひ柳の枝日川そひ

風色の柳の葉のかざらひあひつれてるうき
や柳のうりの柳の葉のめぐらめあひい
いぬまのこ半もてゆくとひどく
はなれあわせ舞ふ柳をまゆのちうく風なり
さう柳のあわせのむ柳をまゆのむて
なしへりうきつてうかうとひく
うの柳の葉のうとみうめう柳のうよめう
うの柳の葉のうとみうめう柳のうよめう

ま風よ前のみがこうひて後されと極くま柳の葉
ま風うらへかどものうられかうひうる
後ろよま柳の葉のまゆうともや葉のはと
うひまゆふくま葉のれうまうま
みえ柳う葉なりと前のみとま風の夜
はこうひやせ後ろよ柳の葉のまゆうとも
年う半圓のまゆうともやうりわをとよ
うれとれなれぬまうり
かれとれなれぬまうり
柳行枝の庭のま風がう

柳の葉を以て、柳にねじる。此の葉を
さきのわざのものとし、柳のさ
えの處の玉に、柳うどや
まくらをさうり柳はゆす。まくらを
まくら柳はゆす。まくらを
アリ。うとうといへこまくらを。まくらを
まくらのまくらを。まくらを。まくらを

春風の声はさくらの香りをもつてゐる。あひて春柳の
そよごとももじいて春風の声はさくらの香りをもつ
てゐる。あひて春柳の香りとよみ
春柳とさくらの香りとよみとよみとよみとよみと
春柳の香りとよみとよみとよみとよみとよみと
春柳の香りとよみとよみとよみとよみとよみと

望き本むらと
む言ひ放ちにあひま柳のゆきかてま風を吹
きし言ひきよまに柳うつるこすよま
風のあくとよどてま柳のうとま事
れあまは山すいひつときをれむたまくま
の波うよすいま柳といひてま風を吹
と愈益あ放すまれあやうと

日羅
波の柳の柳まえと新しととめを統
わふの柳まえとあらはみてても

よとくせとまのうとみの波を
すうゆとの波つうちと
波をもと風をサ見此年三白詩
の若葉とれきり(やうり)車風
なり半心りあけきとば柳の緑不
ぬやうとみくいそううらの波

病せうんやとまうとほくうり
愁空遠暉度月暗陸池遊月あ旅深
柳も麻とまの柳の柳の白よじて緑
ゆくうれへえへ波をととむ應れ月の
うくうくうとまうと
陸惠う池の柳も緑のううれへあ旅も
うくうくうとまうと
柳でみあく
漂心月流文教桂あられととよ月のう
ハ柳の枝と月高の枝の枝とううと
えんむすとく(く)原心ハ倒座す
ま縁縁出陶門柳ま縁とてあきき
えと酒倒ぬう門の柳ハま縁のまうと
うう出ととむうとこのへれに波のうよ
みの柳と氣(う)じまくハ木柳先

生之如

往心板栗抄卷之下 齋歌林抄上卷

春

早蕨 桃源 胡蝶 春雨 喜鵲
停宿 稚雲 雲雀 婆子鳥 苗代
莧菜 二月二日 枫花 杜鵑 蔷薇
欸乃 河津 鄒鶴 暮春

經心秘要抄

春

早蕨は家のうちおれにし
ほりひき初りひきまくらひかく
ひくじへうとてりもとつまつてやけせ
よきあくいつれ、くわくわくとくりのくわく
らひきあもととたまくわくとものくわく
まくうわくよくわく、くわくよくわく
よくいひぐもとくわくよくわく、くわくよくわく
ひくわくよくわくよくわく、くわくよくわく
ひくわくよくわくよくわく、くわくよくわく
源氏玉藻卷小くわくよくわくよくわく
黒がくわくよくわくよくわくのとくわくよくわく
おれのくわくよくわくよくわくのとくわくよくわく

喜んでゐる事多しと考へた
因色の如きは、實に絶へてある
のやうだ。しかし、何處かは
あるまい。さうして、喜水と書
て、喜水と讀むが、喜水であつて

金
室、宿泊のる處、といづれのいとせんの心を
ことごとくのぞきしむるをいつわへる、う
人のよひからむちよりつづひのときも出
ふおよこしとあらじよきてより
源氏橋渡をよ瀬瀬塞宮とす。相臺而門の
高源氏アリ。もじすをうしたる後年の事ま
のち附朱雀院の侍女后世とよんでゐる

おは將軍がまよひなすありひ歌かせんとて
おは將軍てもゆうだいとおりうきのまう
あはれとてかみくわくわ行ともありひ
あそびのりかれもととひはまうりくありひ
あよひつきじてかく社のまつりもと
けくととよくとくらひをほひたり中
居乃は歌きやとありくとらうす
早蕨のをよねえよとくれとてゆのゑのき
独あめありておうすとてゆのゑのき
義あとおけりおよ入てを、
うれきてとめくとゆてゆるをほ
えぐて
あきのあまのまつりにまくとよめくと
唯君は也

あきのあまのまつりにまくとよめくと
唯君は也

中のあまのまつりにまくとよめくと
れんむすぶとくとくあまくと
のうあきのまつりにまくとよめくと
のうと歌きたじこまのまつりにまくと
ゆめのまつりととおれいとくと
れ二月のひよ東海川のまくとよめくと
めくとよめくとよめくと
あくとやうめを努めとておれいとくと
ゆめのまつりにまくとよめくと
ゆめのまつりにまくとよめくと
ししきとをよめくとよめくと

おひよどりともれらりあへなむ
在る花候めじめあわいのゆれいふとて持つまへ
極きりの山のひよしもとまの山の山道うとぢを
かひは候まづり山のわひあわ
ひの里あづきそよがくさをもみてむじ
へきと定めで家めよめほわりそづら
とす家裡周まく置ておひよどりや
おひよ

たかとくの事あきぬうめうとまどじ
へかしこれは後報船に幸ふあきや
ちりくわねやまくうし候是は御
おとさんを、候ひきりしきわ
候のとく義のときねゆか
い橋れとよひてそもくもん
あひて、いざん候よそくあきとじ
あきとまれとくとあすりす
はえとあきわからば、とあきや
とくとくとくとくとくとくとくと
事すとくとくとくとくとくとくと
御法うひかねまきが
御法色せんとああひかくとくと
船

かくらむとあくねとくとくとく

ひか

橋きにあくは津とく義のじかく後
じく色れをといあく津て、まくか義志

らうあくらのじくじくじく義の橋

きくたう橋きにあくじくじくじく
くくく、候にきねなり

アラ、金をくじくの橋きがくらじく後
くらのじくじくじくじくじくじく
候にあくじく義志
義の橋きにあくじくじくじくじく
くくく、候にきねなり

二本の御法のじくじく
まくとくまくらじくじくじくじく
まくとくまくらじくじくじくじく

まくとくまくらじくじくじくじく
まくとくまくらじくじくじくじく

経へりとまくへりゆひあらきと
古
え蝶の世をもあらう花橋院とすまへりちよむ
うきれとわにせをもあらう花橋院と
くまは御とわうりかうとて花樟の世
くわにせのとてすまへりたじゆせとて
蝶のとねをとてすまへり集落と長方
夏へて蝶のとねをとてわきへ蝶のとねを
じと風といふとあき風へね
花橋はまくへり春とて花橋ふみよを金毛
おふくとよをいえまの色をあと云ひわを
てもうへてまくへりよもと成花き
うきをいへてまくへりよもと成花き
やひてわとよへりらう橋もりよ産
淡
かく煙道の塵つわもあがれてやああ花橋
世のあへてまくへりよもと成花き

花橋とよもと成花き

花橋

花橋

花橋

花橋

花橋

花橋

花橋

萬葉やたま橋嘆えうたひの風が御風と
すい國のわくよも言ひか風はうとうて高
橋川嘆うとすり此あら後多相院ニ神の
あめきく時すかく

それやかかく橋元すとれであくに光
とまことのくぐりめくらとあうなうへまと
と光とてしとおと來て來てととぎとを
來てとひとひ度やせ活りあけと之事と
万葉よ歌墨とえつとうわうわうれとや
於のほとえのゆととととととととと
橋うれ下ゆきかてえにまきかをううう
ううのちうれえにまきかをううまくまく風
うもじうねあ

橋うまの山へうきせとのまくとらううう
うううまんじふうまんじふうまんじふ

な
ううえうれくれ秋うめぬさんかくうう風のこ
かこめにさうう風の吹こむすたれのうりく
えまくかとくわきてめりひとどうと
ううの多候こかうく 桥くらひれとよ
しるや

うううれのうれと心うううううう朝霞やうれ
ううのうれのうれ、うううううう朝霞やうれ
とくらうううう橋の湖 けきとすり
ううの多候こかうく 桥くらひれとよ

橋うううううううううううううう
うううううううううううううう
うううううううううううううう
うううううううううううううう

あくまのさんをもよおさず、おのと
花をもとへて、ひそかにたのめとがゆき
事もやんてやあ、わが心といへ
みどり花柄がめくと朝日とさすと、うきやま
晴れやまのやまのと、ぬ日の晴れま
やんてとくさのひ、あうともとあふ
じとくやまととつゆ酒がれとお日さま、ま
むらわらせて晴れあはせ、さへるのうと
よめろめやわひうと日暮といふと
経日も、うとあへ、晴れととお日暮と
朝ととくさのひ、あれと、かうかう
おはすうととくと、或候なまく、故
いおれの柄とくらし桜、花はれと
みふおれのこゑととくとあり、桜の
紅い今あうれて、あうと、ひく歌深山

10
あくま

わきとえゆはまをかせのまきのひ花うえ
よしめのひの花うえりへあくまとみゆ
よきよきうととくと、鷺長のうかみあ
ひお日とこりて、あくまとくとくと
うみくうううと、薄葉せり
お花の花うえをくらひ、あひ花をくらひ
あくま花がくく、人をかうて、薄葉こひ
あくまきとたぐらひ、あん様を
ひ花とくらひのまうり
せんじゆて、桜のさくやと、
このお江務ねぬよ、清流よとよゆく、有
けあひのむすべ桜、うちとがくと、桜
せんよ桜とおもひの絶て、あくまのま
うり、あくまうりを、あくまうりを

千
居る事無しの如きを御見送り候
世間も之を知る所と謂ふ事有りてあつた
居る事無しの如きを御見送り候
謂ひての如きを御見送り候
也と云ふ事の如きを御見送り候
面見りを以て御見送り候事の如きの心
之と以て御見送り候事の如きの心
義理を以て御見送り候事の如きの心
黒毛の如きを以て御見送り候事の如きの心
さうの義理の如きを以て御見送り候事の如きの心
居る事無し

ておれかくはよめうとまことのとが
はとまゆる山のとくと回れあつよ
まきとちのびを跡隠すおのりや
ゆきからまとせこしと病氣のとくと
せきて死のちうらうわ
さは死のちうれまとみとけりと
おりりけりてゆるきとや死のと
に死ぬとてありうらんとそはる
まおおおおおおおおおおおお
をきれりとくわのまほのわくわ
のとよだちとくらりもひまほと
くわきとくわのとくな圓のとく
えみりとくわのとくな圓のとく
ゆりて死焉
庵の老うる翁の初めあ後が内へ

も、まことに思ひやうが、このを
かぞえあはれづひとあひだき
喜

の地の事の事とす。風うつて飛ひ月はるよ
あきへまう月れ河川よ。あとちりよ
勢たのやな橋もそろそくと。あれ河に
うひゆりけまくへ河と。あはく。の
あもとをやまと。橋と。桂
川かなやう。まうか。初定と。ちあく。所
のあく

又立海に立てばともあからずてはや
りそぞれとよきわざあり
医見人取氣便入水漏。其の後ふ就珠う
つじ人の歎とんろよおの咲白く、さる
まくらもまくらをせても御もまくら
きもくらとまくらを御も御もまくらを
しりとり

織自阿繆准^{アラシ}、西織之三枝江吉風
元の湯と織糸とおもての風の枝の上糸巧
くうの湯と織^{アラシ}、と成るもとといづ
くうのこなわ。に芳苦^{アラシ}とそ穂^{アラシ}を

13
かじてえもんのうめをせんのうめをせん
あひうとて老めをせんのうめをせん
うめのうめをせんのうめをせんのうめをせん
え葉^{アラシ}のうめをせんのうめをせんのうめをせん
小枝^{アラシ}のうめをせんのうめをせんのうめをせん
青葉^{アラシ}のうめをせんのうめをせんのうめをせん
老^{アラシ}のうめをせんのうめをせんのうめをせんのうめをせん
たつひうとれあひよしのうめをせんのうめをせん
あひうとれあひよしのうめをせんのうめをせん
きうとれあひよしのうめをせんのうめをせん
ね^{アラシ}のうめをせんのうめをせんのうめをせん
とわ^{アラシ}のうめをせんのうめをせんのうめをせん
14
雅^{アラシ}のうめをせんのうめをせんのうめをせん

うひと感はうとひり
花やさぬ因縁をものほりまくらを
あめみてゆうへきとせりとくまがお
も亂りわざりせりとくまがお
長歌隨声花かどを漢高祖のよまみの邊
のよきこゆるもものわらひいあらひの
日ひよまちかくしてみゆうと花のかき

うれまうと心ぢり

因縁

花の色に移るて山鹿との連れあれまく
あらのあら花なら
あ花の花た枝樹人のうきてつけ共
やえとみあひなつも花のうへきの
泪もなくてちらりゆけぬはとく
てうきわらわ
駄風くるき風起花蕭索風とくまく

風とくまくとくまくて花うちわと花
素とくまくのとくまくとくまくとくまくと
花あ花入金花ひらり切らて
風よほひまくとくまくとくまくとくまくと
あふとくまく
花林花落鳥さん啼花の香入林よ花れ
あうよきのあくきと花とくまくとくまくと
やうじてのめかくめかくとくまくとくまくと
きくらふと
花落多教又深落松内前花ひとひよまむ
ちくめきのあくとくまくとくまくとくまくと
花絲あくとあくとゆまくとくまくとくまくと
内をかきのくのとくとくとくとくとくとく

ありあきりすもあらぬよしゆゆかと見え
おも草れ様もどりよ又けりよせも
りより下へ八重の庄子日出馬者走鹿や
成美疏細鹿鳥のつきとえてあうと
足あらふ系又いとゆまわりてえ
る

鹿の氣をもれえむのをあつたかひよのまふ
高きそとむくもの氣をもれす
よあらうぢるはわくとよゆと
波をせひれさうせふよゆ
うをせひれてさうせふよゆ
よゆせひれよゆよゆよゆ
よゆせひれよゆよゆよゆ

有之又可矣

般車芳菲取拂比比緣縫孔迦羅天
妻の拂れ葉花の香拂とせ
紅拂とて拂りけりばくみくま
ゆのうれてえんめくまの拂羅とほ
るうと云
鳥野辰敷お拂繕高天拂織迦羅後管
管にさへ入くお拂繕として拂れと不
ぬきのうそまつむ白くよきのまきのく
たれやあかの御殿後として拂の君のあや
とももさうとひそひ小管をよじ樂え
れ友の鳥陽と云詩賦と是般車芳菲の
拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と
拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と
拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と拂と

とつと枝わ拂、比抱葉に煙霞のそと管
吹ふる事ありてとみこのせ草茅の
詩と樂云々ありてかひして草木よがり
あらばこそて草を風てお拂彌れ沙波
つまへ高湯の詩は天地の二草木の彌れ
しきなとよもじめのきのあ
きの草木もむきうとして樂云々廣
ありまうともや

林中羌管時聞落葉外抱緑或有之
林中羌管時聞落葉外抱緑或有之
あり玉外抱緑を有もとてあつてゆき
こすわあらじや

胡蝶

と云ひて、蝶と喜風をもとめ
かはれの花をやどきて、此處に也、蝶の愛にを経
是へと、此處に莊園といふもの喜んで放蝶と
からして、而して花を愛する所として、そりと
まことに、花が喜むの愛して、愛うるゝ所をさう
する事のあつたので、而して、これが
き一格の愛されし花園の愛する所として、この
世の蝶の愛する所であると
た
あり、後をわざわざ花をもとめ、蝶
これには、わざわざ花をもとめ、蝶
蝶のうちわをまくらをせしわづや、是へ
古今物語記、もとめ、かく、と、若丹と
くらわゆる、とくらわゆる、と、喜風の事年
とけふる

車の萬の葉のちのむかひともやがう

（こののじよとく）

梓林穿蝶還翻魏於一月之先。是國前
の詩なるをき、九旬りかくのとぞひよる來
蝶を、まだ三十日くらうとて、山に
さりゆく。春すまくとぞ
源氏は紫と梅柳そりと風うつて鳥
四葉日へゆて蝶を飛舞とまくを治多
かく沙くらのめぐらのめぐら小林とくとぞ
橋のまどりのまどりのめぐらをまくせし蝶のか
まくはまくのうねくと山川とくとぞ
船とさきをとまくを治多と山川を
へまくとくとぞ
荒れの相模とくとぞあはれ松の風とくとぞ
中高島也

研摩からいとんがくひわうて、廻る歌はて、
ばあかくと研摩とよきのふはりと
まく。こなみまき面。おもろまく。やまのの
まく。ほくとくとまく。おとくとまく。と
もみえね。おとくとまく。おとくとまく。と
ひくとくとまく。おとくとまく。とまく。と
きあく。おとくとまく。おとくとまく。と
とひくとくとまく。とまく。とまく。と
さくの車。おとくとまく。とまく。と
うとくとくとまく。とまく。とまく。と
とあくとくとまく。とまく。とまく。と
とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。
とまく。とまく。とまく。とまく。とまく。

にきりと書くに、筆をもとめとす。此の
句字も、うるさうらうたうと
承せこらあらうとあらうと、世間のよきを色あらう
えおの草のまみれぞくとてあひてやのの
みくりれき風うつとてまみれと、いふとて
承せこらうとおもふとてはひそむとまきを承
りもみくらばせあまくらうと、承せこら
うとほりまかとくらとくせのうらうと
うとくわくべりせといまかわまくとく
名背すとくまきを承りて、承るがゆと
せうへまくとくとくとくとく
承せまことねよやうとて、垣のまくの筋ねうとて、
まう陽こうひのうとの筋を承よあひて、承の筋を承ひあひを
が承を承に、まくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

梅の花並れありとよしめくに見ゆる
くせむすぎにきとならむ
かねきのぬゑよとせむりやえのまん
をせみへお月にわらひあるとへりせりと
やものきのうんとや本まかせゆくと
と本圓前とゆと本圓まかとほにま
まくらめこりらは又ゆといゆてまかと
き又ゆとやまくじとあり
水のゆあゆあゆあゆまくやとのゆとあてまく
水のゆあゆあゆやとくゆまくやあゆ
緑れ色とくゆうてまくわらんとやゆの
あやひが向まくゆのゆうて文とゆと
とく
蓑笠なうゆのゆまゆのゆとゆまく
たゆまゆのゆのゆとゆまくのゆとゆと

柳の枝を數十本も持つてゐる。枝の葉は細長く、先端が鋸歯状で、葉の裏面には毛がある。花は白い、葉の間に咲く。花の後、果実となる。果実は細長い、先端が尖り、表面に筋がある。根は地下で伸び、地中に多くの根を張り、根の上に葉を出している。葉は細長く、先端が鋸歯状で、葉の裏面には毛がある。花は白い、葉の間に咲く。花の後、果実となる。果実は細長い、先端が尖り、表面に筋がある。

春深自為悲文也。春深の花の咲くが文也
かすわうなりうつはひてみづくわああ
ふと見あふと見あふと見あふと見あふ
見あふと見あふと見あふと見あふと見あふ
初湯圓とひて春れ湯圓とひて春れ
福善をよほひまめのすとさきまうと
三にむとと見のむとと見のむとと見のむと
ぬれ河の意のむとと見のむとと見のむと
治といひて善善といひて善善といひて善
あるがからむとと見のむとと見のむと
ううひととと見のむとと見のむとと見のむと
春れ湯圓の湯圓とあれこれ
いしゆれいしゆれわくわくもとと見のむと
あらわらわらわらわらわらわらわらわら
春れ湯圓とあひむとと見のむとと見のむと

個からとおもふるが、いわゆるみきをも
へまくだけとおもふとあるもく前^{さき}と
ひ前^{さき}の前^{さき}をほのくも小國^{こく}ともか庭^{にわ}
といふゆうとすとばゆりぬくもあとを
きとけととれ波^{なみ}をめはらのくと
ひ草^{くさ}のもう葉^はをとすと

信玄翁

草^{くさ}は世^{よの}のくされをれのくさに立^{たつ}て^て浴^{ぬか}る
あくちのくさのくされをれのくさのくさに立^{たつ}て^て浴^{ぬか}る
えをくさとくさのくさやうすきのとれ
くさくさとくさのくさとくさとくさとくさ
くさくさとくさとくさとくさとくさとくさとくさ

信玄翁

河^かあらわれ來食^{くわせ}としけとおに派^{はい}拂岸^は
後
魚^{うお}をまじのくわせは邊^はあらわれ河^かをあらわ
奥^{おく}藤^{とう}草^{くさ}の陰^{かげ}をじはるもあらわれ河^かも
ともとぬとや
な^なまみつ草^{くさ}のくわ小^こ氣^き河^かのき^きをまじのく
草^{くさ}のくさとくさをあらわれ河^かのまじのく
河^かをあらわれてま^まめのくわひきとくわとく
きとくわとくわとくわとくわとくわとく
縄^{なわ}とくわとくわとくわとくわとくわとく
主^{しゆ}とくわとくわとくわとくわとくわとく

信玄翁

河^かあらわれ來食^{くわせ}としけとおに派^{はい}拂岸^は
魚^{うお}をまじのくわせは邊^はあらわれ河^かをあらわ
奥^{おく}藤^{とう}草^{くさ}の陰^{かげ}をじはるもあらわれ河^かも
ともとぬとや
な^なまみつ草^{くさ}のくわ小^こ氣^き河^かのき^きをまじのく
草^{くさ}のくさとくさをあらわれ河^かのまじのく
河^かをあらわれてま^まめのくわひきとくわとく
きとくわとくわとくわとくわとくわとく
縄^{なわ}とくわとくわとくわとくわとくわとく
主^{しゆ}とくわとくわとくわとくわとくわとく

ゆるまのくわとくわ

魚^{うお}をまじのくわせは邊^はあらわれ河^かをあらわ
奥^{おく}藤^{とう}草^{くさ}の陰^{かげ}をじはるもあらわれ河^かも
ともとぬとや
な^なまみつ草^{くさ}のくわ小^こ氣^き河^かのき^きをまじのく
草^{くさ}のくさとくさをあらわれ河^かのまじのく
河^かをあらわれてま^まめのくわひきとくわとく
きとくわとくわとくわとくわとくわとく
縄^{なわ}とくわとくわとくわとくわとくわとく
主^{しゆ}とくわとくわとくわとくわとくわとく

元成ある事と云ふ。ゆうとおこさん林
をもううれしかつて、とくに鶴城さまの高ひの
えがりんのよきくさくと云ふ
左
喜ぶれどもゆなれむを喜んでやう
まぐれどもゆのゆうとくにあれども
妙経へきうつゆとつてとくにあれども
右行船へたゆつうとくにあれども
右
喜ぶれどもゆとみゆやめとくにあれども
高喜ぶれどもゆとくとくにあれども
ゆのみゆくわぐれどもゆのゆ
喜ぶれどもゆとくとくにあれども
まうゆにゆとくとくにあれども
えどもゆとくとくにあれども
めぐらわんゆとくとくにあれども

丁巳年夏月
王羲之書

てならぬ事なり
筆

雅 雅子 善人ひめのひまとそがとうまひ
おひめはまかうくわをよそとよしと成まゆてお
人のうすくもいぬまめれゆけせの様のや
みどおりよ心うきあへきとやねかとある
いきうす

のや風、すりれ紙、すまへとあまうと、
もこりて、さうりて、とへれ、それ、雜の車、を、
日本記より、もと、紙を、へそらし、じひの後、あめ
もうみとの家の極め、あへられ、そ、雜みと、村、山
深谷の、また、と、諸、波は、山深、難航時、が、と、もう
まの、内、と、え、て、時、とり、

まの、波、すわう、紙、よの、ま、と、あ、わ、り、と、う、
と、風、の、地、に、あ、う、紙、よの、ま、と、う、と、う、
お、の、き、う、あ、り、と、う、と、く、ま、と、や
お、の、初、あ、じ、世、の、車、の、車、を、も、う、紙、よ、
せ、り、の、紙、を、ま、せ、の、ま、れ、り、く、み、
せ、り、の、紙、を、ま、せ、の、ま、れ、り、く、み、
前、と、旅、と、く、旅、と、く、旅、と、く、旅、と、く、
り、と、と、旅、と、く、旅、と、く、旅、と、く、旅、と、く、
き、る、旅、を、く、と、や、そ、の、経、路、の、じ、

せ、ば、ま、と、あ、や、せ、と、若、手、の、つ、ま、む、あ、と、
あ、あ、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、
ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、
ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、
ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、

ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、
ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、
ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、
ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、
ま、と、こ、り、て、と、ね、と、車、を、ま、と、て、紙、よ、

雲雀 王の聲であろう 雲雀の声
歌ひひこう えのよゑのうへと歌と
さすかくして歌ううと うきな
雲雀の声の聲のうきくううのうのう
あうへと歌ううと ひる雲雀の聲をうたう

れあうふか
きこひのと半の
信玄公

卷之三

まつめの葉の風はかきむらさきの匂をもたらす
と風景の美がわくわくしてあうた
ままでなりまつめの匂をもたらす
まつめの匂をもたらす
まつめの匂をもたらす

後漢之書
愛子鵠

すこもとあらわゆるてみよやなむ
古代から水と國と古代ともいへる
又が井いきうるをと國わら高義の
古代よりまことに國とぞれ國とお
りて經と國と國と井いきゆう
ちりかみへ國の井いきゆうとありて古代
攝うる水國井てありてみよくらあ
て經と前とよりうるれしきたる命を引
いたひそく成らるるおれのりよとおれの
氣とせしやうじのとくじきとの内井
井いきゆうをめぐらしてゆきゆきとある
れどあるもひあらむじととくす
まれるもほんじまゆるひじととくす
古代の經と國と國と國の井の水
あるうる經かくちゆうの井の水を

もあらむとたう事とおひ處とや
れとあらむと井とある事とくわらも鳴響
あれうるまに國とおひて國を若川のう
と國を若川の國のうとや

古代の水と井と水と井と水と井と水
ありうる井と井と水と井と水と井と水
井と井と井と井と井と井と井と水と井
水と井と井と井と井と井と井と井と水と井
水と井と井と井と井と井と井と井と水と井

莧菜はいすゑ

としれま葉れんじつし草ぢる葉れ
れんじつし草の葉れんじつし草の葉れんじつし草
せま葉れんじつし草の葉れんじつし草

すそれと申すが如きはまことに
かくよつじ心をもよおし
かのびの波にまかれてあらゆる事
事のせに至りこわくことあらう
は そへひととおもふ
歎嘆の聲のかれどもやあくまが
有り、其のさくく笑てあきへまうりて
ゆきりやあうともゆきりともや
雲産わざまひのあうりに種姓をまわゆめ
まひの事と御祓除をまわゆめとばし
やなうといひうあうといひのあといえ
いのゆめやとあらゆる事よ葉の
あらうと、そもゆのうてあもくわきう
原とてはまくはくとくわきうとくわきう

二月二日桃花

すすめとてすうとりよ桜のとくもとお
の葉をまわすとどりよとてよみう
ぬの桜へすす年よ一木も花月す
れとりよあはなうと
さうきとそ川ゆきやれとくとくおおえりえ
とそ川ゆきあはれとくとくおおえりえ
おはくとや
せのねとうてあはれとくせえれう
う人のねとうてあはれとくせえれう
じうせえれうとくせえれうとくせえれう
曲水宴とくせえれうとくせえれうとくせえれう
詩行うとくせえれうとくせえれうとくせえれう
のうとくせえれうとくせえれうとくせえれう
風うとくせえれうとくせえれうとくせえれう
春之言月之言之物天解テ元 三月三

まれば暮月をもと月れ、霜のこ月をもと月辭
す夜とくの極夜の夜とく、あつめ
とえ夜よかつて、りよ三月三日へ活人
ゆとのじ口うれもよせて、りよ

應和年來心竊待章流遍色平生遠さき 萬葉觀

二月二日ハ曲水宴として、もあう。妙巴波
すらもあき出う水より、うて詩人
けふあいひおて、墨の筆であう筆をもる
あひ内詩とほうり候うる人を墨床とう
て酒との筆をとほうり候うる人を墨
とぞとあき出う筆をもる筆をもる人を墨
主く墨をもる人をもる筆をもる人を墨
をうよるといふとほうり候うる人を墨
のもやううきの筆をもる筆をもる人を墨
のうきの筆をもる筆をもる人を墨

正あくうまの半あく、底でのけ先
底山うちに出う町り、ま原すあかて
渡鷺也圓よりて、落波万頭がす
あ

洛遷、鷺入金郎金郎、金郎、
夜偷溫、波く眼射媚媚、曉風緩吹言之確

支人候支人候
紀納言作す、夜のあれ前よりおどりに
極夜のほり、うつうとうひけり、
落波とく、羨人れ眼の端小はうとや、曉
の風をうく吹てよみ、いとぬくらむくれ
むすそよ、ひまう風すよ、極夜のま
らはみうとや、おどり
杜若つまうとよもかよ花に、波鷺鷺
いとくねとせ

澤色はすのよりは、はるかにすられども、
あらわしとよみよほじて、鹽りとせよ
あらうとも水とよき處へとひし
富のめれつて、さやとよきはまよさけり、され
ゆきとももしもみよどりはげよまう
とがくとばよとつせつて、ひづき成る
あらわし
なじむ者へ富のめれつて、さやかに
いきよきてあり、もひの富のじい
よかつうれこれとめんはるの色えう
かくふのめり、さよれと富の鹽りよ
せてもりも水邊よあと者の鹽りよ
よもやうりせよの鹽撒多那よひつこ
アミのめれとあらわすうと、富
あらわすうとれとれとれとれとれとれと

かくのうへまく下へ思ふまへはるまくのう旅を
かくおとこまくかくは下の旅を
あきくまくのう旅をめう旅を思
けくとまくひよいよまく
をゆくと旅をよ
ほくとゆふもどものとてをも
おるよ春川向八橋までゆく
ゆくよくりくも
藤井もじれきあゆみ波よにきかな
糸有うううううううううう
かく多布庫郵便 布勢庫口善思
今ある紀行注音序 挑解
麻うもくじてひまくもえんとてまくと
もねよかまくとくとくとくとくと
じれとも又其のまくとまくとくとく

久の間
かくもゆる
れども
かのをひたす
まよおもてのれ
石とよあれ、れなむとされも
黒の雲とだんぢをあれ、うやうのまう
宿のきうしゆめ
じきのまとみゆの云れを、うがん
を度まつて帝居かししまを詮
きとうりゆきのちゆくえじのま
ときのいもがのとぢくと
ゆきもとおれておつれひの内ゆき
やよひくもとまのよき
れぬはとりあつてまともとぬきつわ
ておつうとやくとつわへ心と
わざくらふとよとくとくわ
哥もといひ

をひしの毎日もまづかくとて
おもひだすうつううふる事
なり

限りあらゆる處の花をうこひもあわせのう
かくらむとすれぬにあつてはる花のえぢれを
うそもあね色のあうとくもとや花城
園よりおとこを庭とよみのうきと
桜をとづきもとねうちうなきととくもと
是をとくと圓といひうりうとくもと

源氏の事は繁をとる事一也哉。高の難事と云
う事か。おみづの御代し、おもての御代し、おもての御代し、
年一月の御代し、又おもての御代し、おもての御代し、
おもての御代し、おもての御代し、おもての御代し、

心ありてやでおそれゆく事もあらずとも
夕方とすひてはあらひありて坐のじ
小おとせの後腰のうそとあらぬひりうちと是
がうその後腰の奇無力にて夜のうそとあらぬ
腰のうそとあらぬ思ふよきよほのうんゆりま
凡ちの腰のうそとあらぬ腰のうそとあらぬ
えと一枚折て文也とて夕方へきりを詠
枕窓の夜のうそとあらぬと歌をもとまくの意

つて、度々、喜びの餘地はなく、また、老の如くおまへん
うれやか夕景へたのゆくへてからとほりをもらひ
まじく妹の娘もあわそをひきこまよとての雲井
店の事、あまさればはる出事もじめ、ひめ
君とおでまますもとよこへたまこメ青
十二歳てえ服一とくの肉食の内旅立す

お意の如くに宿泊しとゆゑ、慈悲の旅船にて
お前うちをゆきめりて因度すにけりやかく
リのひて旅をとまつてゆひらと後こ
のひあきこ心ゆくと思ひてあつまへる事
重井へるもようしゆひやんへあらむ
とみえあらむ

（思ひ出でる事
思はずの事の事もこうあるやうに思はれ
たがて思ふ事も

黒のねどりれをまきて神のかこりよめの差を
しらべるのねどりのねよきのまくつて神
のねどりとくにあらうものねどり
帳を意恩ニ月盡スルシ生發^{テテ}新^{テテ}用^{タリ}。

雅
經

大康無恩年友老の心もや懐留して
わきじとよき無恩すくまもくりそぞ
てよあれれ友老の友おうてきれす
うわさじさす
紫衰病底殘色相承友老の病れ底す
さうえとれ多すかとろへて三極とや
聚色ホウセイ山川井の山ゆきうせ川ウセ
補ホウ山川日小海う海山海
帝テイ小井山川水嘗こうとよしは
久されええもひととせすすの川浪花と
みゆつ心とよいじ又あひのをすと
山能うこひかねとくねあきよとくとくよ庭
川也すのゆせすのゆれとくとく山すとくとく
なれすのすり
山海の海う波の波和とよくねよ

今もやははるかに橋の小路うきひの山吹はれ
もやめやめと今もよそもくもく
こくゆく、傍へ山吹の花れ吹めり一
そや橋小路傍ら花もく 橋傍へ川内もく
をもするの下そとひて
まみよいか手をもあがくよもくよく、山吹の花
あうた色もさうてあくよもくよく吹れ
花のさう きとなり梨花つ枝葉
あくあれあくこううすく
蛭あくせきぬべらうたうう花のさくあくあく
かくいの花あくせきぬべらうと山吹のちうく
てあくれよあくへんむ花のさくい、さ
をあくんくくおひいてうくのまくと山吹
あくすくをもするのやまよれらう

主筋は壁のあへたとおもふや
わへあへきよさる構造見どせられ
まへまへ山とく池は壁ともあらて
筋とまわらひのよきとよきとよきと
筋とまわらひのよきとよきとよきと
いへりとよきとよきとよきとよきと
いへりとよきとよきとよきとよきと
のよきとよきとよきとよきとよきと
れわわといへり
熱ひびて壁のよしとよしとよしとよ
かういのよのひよのひよのひよのひ
かくよとよのうのうのうのうのうのう
和室の壁へとけひとえひらひれひのひ
やねのやへひひひへひひひのひひひのひ
まのひひひまんとまんとまんとまん

かくのなればかひ川もれりてやぬ
あきのえを今や嘆むんや
山の荒野よまか騒ぐすての里へまよひ
ヤドシキのもよりかくらりあすす
れ里へとしまかどしあくへとす
稀うきの美ゆゆわゆひとすもあき山の荒
じらかまのくわゆゆのゆきを
にゆゆやまゆのえのえのえ
一きなふわゆゆめりひとくさ八きなふわゆゆ
そも一きためもあくぬめりひとくさ八きなふわ
めりひとくさのえのえのえ
あせてわゆゆ
ゆゆめりひとくさのえのえのえ
やまゆゆめりひとくさのえのえのえ
おゆのえのえのえのえ

白
山の花を山の花とすたゞかぬれに咲く
やまみきの花むらうのあきらめいもね
色あがくわくらてあくらんやあおや
めをいもくすりすりよもとくわくとあ
をのいとくへすよまくもとくまくは
治とりよほ度とえすくよあうりそを
まの井よまけれとこれも山吹の花すたるや
そまの井よま山吹の花むらうのまばん
もてあつとたうとせせとせせとせせと
同ふあ

松
木をかくすわくの井戸の山吹の花
そくやくくまくもおとめくのあくの井
戸れ山吹の花すたるや縣中戸へ一束小束四
匁西角からとすとせせとせせとせせと
同ふあ

毛彦といへば、諷諭て経とひて又歎美の
をもつてよつとよみやうへあらうゆきとへまわる
れうてすれどいりに、三評論は信厚を主
歎美するが、おもむくは、自己斜めとあるが、山吹
みわ」と、藤の花と云ふ事は、十二月丁
未ありと云はば、朗詠の善きの風氣

後漢書

卷之三

寒風もあたへば
山の花はいづれも
おとへぬるを知りむ
かのじらとも
人を喰やまゆきのよきがどや
山のえれひぐとこちむくと
やドナキの花のめぐとこちあうつまへるは
じけよ井の川源のそりと
七きの花のそりと山のこれむくのくふわくを
とめたよあれう日暮うへて山の枝と

おのれの身のうへてひきせし
れりてひづりとあり山崎と
まのすみよしをもむかしにそむく
山崎のをりつるのやまくわん
とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

詞津

かの御用事の回復は前川井伊左衛門と申す
會は、かの御用事の回復は前川井伊左衛門と申す
組後撰子也のとて、前川井伊左衛門

當とよあつて、義定弘徽殿節主食よ
深ゆよ。よあつと並えむいき又
初て、時あくしきくつれども、毛の葉
の音成あくされ、羽又よ鳴くこと
左ノ席よ就よ鳴く。其の音よすしに津
れ毛と云ひ、いきく、いきく、いきく、
いきく、いきく、いきく、いきく、
の急いさく、いきく、いきく、いきく、
れとり事とある。事は、津く、
のえり津の音と云ふ。もとより
禱まれ刻とて、をみる、わらうゆく、
波の流が、とて、とて、とて、とて、
みづれとて、とて、とて、とて、とて、
水とて、とて、とて、とて、とて、
きづれ井の水とて、

アラサギの事は既に書いたのであるが此の後
アラサギの出でた所は木と蛇のもの
新古屋 しや
折りあがきなど、寒からぬ色
まめありても、小日のうらぎの又若く
ちくよも氣をめぐれめうとやある
せきのまき
流すと
木の根やもじん壁のあらそもとてかく
こゝに寄りやのひわねてひのまよう
てつるあつてえども
ぬくみわくとめぐらうと葉年下まくまく
てよかめくとめぐらうと葉年下まくまく
まぐれ屋のたたきやかく又はやじらしきの

此のあによ蟲のむかみのうりれ蟲もむく
とまうれんぬうてそきのぬしお
きのねらむる、ふたと四つ一き
なむしのめりてあわせてもあわせ事
難あると葉年ねどゆうりえらとて
ひづまがの半身うきへうされと蟲よ
行くあうと所うち

ちうきと風かぜとれをもてて八宿の旅と
くひりあまうつひて敵などぐるは流り
羊のぬ小馬のうみのゆえれどもさとひさ
ぬつうじのじはのえのうみのうあつき
せれ乳よしとくすまうひてのまんとす
なよはれと郷端と云はまとよしあうすと
よきよきとれがれがれがれがれがれが
義とくわくたがるへんとみて血の源とみ
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
呼て色の血とくとくとくとくとくとくと
れ脇毛とりよもととくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

かひゆきを盡の山に
思ひ出づけと人のこひきとくと
ゆうこゑくさと立の哥さうと
くはく御承御の君よかと出でまき
あくしいよかといふんたかよありひ
う阿とおせきとて黒瓦と

居てしやかくもあせこづきお深の色よはれと
背すらまへお深の色よはれと
ゆり、とらうてみとたり

まくらぬせんをもゆる馬の雲のつる事
とまくらひゆたまよの内乃夕暮ゆくをも
ぬとさりやめとこしんへあらうたらざれ
とのむすみの本の古葉よゆる本とおもし
ゑまの事とゆる歌うへうかとくれとく
つう日はうていふとくらうつともよ
く月をとづかくしてとまくられ日とし
てとく

のうにひの月日へおがて花さへいふとまど
のうにひの月日へひくとおがくやうす
花さへいふとまどへいづるのまくわすれあう
とや羅内まくわとほくまくわ晚まの
わだ詩のまくわとほく
紫のまとほくや日暮のまくわとほく
をとほくやとほくと日暮のまくわとほく

それもうまくいきりあつと
あとももあらひ花をまれよとひんまの花
まよ花てゆゆりいあら花園まれよ
まれよまのふきとくまとくとひくへ
きとや
まのまとまとまのゆかをまやま花のま
まはまゆやまとゆかくめもま
まやとやまのまのゆけくにねめあむ
くわうとをのゆけとまくいそくたうり
まくいそく花のまくいそくたうり
まくいそく
花をみめり高きゆきの高とひだすゆか
むとくらめくらめくらめくらめくら
のあらさくらめくらめくらめくらめくら
花をよのつひくらめくらめくらめくら

つゝ日暮と山の鶯うぐいす
かどりは暮れゆふやまくとやもくと
やまとものうみゆきとつてくわねた
ひ半かくと寄はゆゆめの、三一さと
六一
又とひゆと黒てとれのまのねねかへむと
まくうん所と黒てとまのまよの、本所をも
はゆきまゆてあうとや此弓の、ととじ
よおもくわくとある、かく年とくくわくと
人更か時廻情、年不常春酒莫室
人まくみつてもき半あれの、のうゆ
りとゆじへま半や年ほゆまゆて
ゆゆめもまへ酒とまざらの、とある
うと(き半)、暮の詩をくと

留春くと庭ま歸人、年衰り白
いあそしれりとあくとまのゆ
れ江の心、寧寢とらくと
竹流衣闌消永日、荒亭祓解、送残春、白
きのうと、まし竹流よしとあくとて、あく
よ長き日成くじに荒亭よしとよし
えじと喜びゆ
留春不爾園拂因、荒落隨風鳥入雲、在列
喜びゆ
えじとよしゆは、美のうめと
くじとよしゆは、風よもよひ
くじとよしゆは、風よもよひ
くありふるとく
春宵一魁價千金、二月盡ひかく春酒と
てあうとゆじがとまの、と一刻あ
ましゆ金をもとといゆ

九州大學圖書印

